

鳥羽離宮造営関係略年表

年号	西暦	記事	文献
応徳3年10月20日	1086	白河上皇、洛南鳥羽に 鳥羽殿の造営 、都移りのごとし	扶桑略記
寛治元年2月5日	1087	白河上皇、初めて鳥羽殿へ行幸	中右記、百鍊抄
寛治4年4月15日	1090	鳥羽殿馬場で競馬	中右記
嘉保2年8月28日	1095	白河上皇、鳥羽殿において前栽合わせ(和歌会)	中右記、古今著聞集
永長元年6月3日	1096	白河上皇、鳥羽殿以南伏見以北を院領とする	中右記
承德2年4月2日	1098	閑院の舎屋を鳥羽殿（北殿）に移す	中右記
承德2年10月26日	1098	北御所（北殿） の造営が成り、白河上皇が移る	中右記、百鍊抄
康和3年3月29日	1101	白河法皇、 鳥羽御堂（証金剛院） を供養する	百鍊抄、殿暦
康和4年3月18日	1102	白河法皇、五十賀	中右記
長治2年5月14日	1105	鴨川、桂川が氾濫し、鳥羽殿が浸水する	中右記
天仁元年3月23日	1108	三重小塔、供養	中右記
天仁元年6月3日	1108	白河法皇、東殿で塔の場所を見学	中右記
天仁2年8月18日	1109	白河法皇、 鳥羽御塔 を供養する	殿暦
天永2年3月11日	1111	白河法皇、 鳥羽殿御塔 を供養する	中右記
天永3年12月19日	1112	白河法皇、鳥羽東御所で 多宝塔 を供養する	中右記
永久元年8月21日	1113	大風雨で鳥羽殿の築垣が崩れる	殿暦
大治4年7月7月	1129	白河法皇、三条殿で崩御	中右記
大治5年12月26日	1130	鳥羽泉殿、寝殿 を建てる	長秋記
天承元年7月8日	1131	泉殿内に 九体阿弥陀堂（成菩提院、三条西殿西対を移築） が供養される	長秋記、百鍊抄
天承元年7月9日	1131	白河法皇の遺骨を香隆寺から 鳥羽殿三重塔 に移す	百鍊抄
長承3年4月19日	1134	鳥羽御堂（勝光明院）の上棟が行われる	中右記
保延元年7月8日	1135	鳥羽御堂（勝光明院）の造園に着手	長秋記
保延2年3月23日	1136	鳥羽御堂（ 勝光明院 ）の落慶供養、宇治平等院を写す	中右記、本朝続文粹
保延3年10月15日	1137	鳥羽上皇、鳥羽東殿御堂 安楽寿院 を供養	百鍊抄
保延5年2月22日	1139	鳥羽上皇、鳥羽東殿の 三重塔 を供養	百鍊抄
保延6年12月12日	1140	鳥羽上皇、鳥羽殿内に炎魔天堂を供養	百鍊抄
久安元年12月17日	1145	鳥羽法皇、鳥羽東御所（安楽寿院）に移る	台記
久安3年8月11日	1147	安楽寿院の南に 九体阿弥陀堂 を供養（九間四面檜皮葺堂）	百鍊抄
仁平2年3月7日	1152	鳥羽法皇、五十賀	兵範記
仁平3年10月18日	1153	鳥羽新御堂（金剛心院）が上棟	兵範記
久寿元年7月29日	1154	鳥羽新御堂（金剛心院）御所造営成り、鳥羽法皇が移る	兵範記、台記
久寿元年8月9日	1154	鳥羽 金剛心院 供養	兵範記、百鍊抄
久寿2年2月27日	1155	安楽寿院の 不動明王堂 を供養する	兵範記、百鍊抄
保元元年7月2日	1156	鳥羽法皇、安楽寿院にて崩御	百鍊抄、兵範記
保元元年	1156	保元の乱	
平治元年	1159	平治の乱	
応保元年正月7日	1161	北殿焼亡	園太暦
仁安元年11月6日	1166	北殿新造	兵範記
嘉応2年8月8日	1170	大風により、鳥羽殿の北楼門が倒れる	百鍊抄
治承3年6月28日	1179	後白河法皇、修理後の鳥羽南殿に渡御	玉葉
治承3年11月20日	1179	後白河法皇、鳥羽殿に幽閉	山槐記
建仁元年4月19日	1201	後鳥羽上皇、鳥羽南殿修理後初めて行幸	猪隈閑白記
承久3年5月14日	1221	城南寺流鏑馬揃、挙兵、 承久の乱	
承久3年7月6日	1221	後鳥羽上皇、鳥羽殿に移る（幽閉）	吾妻鏡
承久3年7月13日	1221	後鳥羽上皇、鳥羽より隠岐国に遷御	吾妻鏡
安貞元年3月30日	1227	鳥羽堤を築き、鳥羽を修理	明月記
仁治3年7月1日	1242	鳥羽勝光明院、焼亡	百鍊抄
建長2年7月27日	1250	御嵯峨上皇、鳥羽北殿に移る	百鍊抄
天正13年11月21日	1585	豊臣秀吉、安楽寿院に五百石の寺領を与える	安楽寿院文書
慶長元年7月13日	1596	伏見大地震 （安楽寿院多宝塔倒壊）	義演准后日記
慶長11年	1606	安楽寿院 多宝塔 （近衛天皇陵）再建、豊臣秀頼が片桐且元を奉行に命ず	安楽寿院蔵棟札

第 238 回 京都市考古資料館文化財講座『清盛の時代』

2012年7月28日

第6回 鳥羽離宮

財団法人京都市埋蔵文化財研究所 前田義明

カーブを描き、勾配もなだらかです。池の東よりの中央部には中島を築いています。池の西側で建物跡の基礎地業は検出できましたが、礎石等は削られその様子は明らかではありません。

白河天皇陵は現在、一辺 30mほどの大きさであるが、その外側に幅 8 m深さ 1.5mの堀が巡っていることがわかりました。堀の御陵側には石垣が積まれ、中から和琴などの木製品や三重塔に葺かれた有段瓦が出土しています。

離宮の中央部に位置する金剛心院は、鳥羽法皇によって久寿元年（1154）に建立された最後の御堂です。もっとも調査が進展し、ほぼ全貌が明らかとなっています。検出した遺構は三間四面積迦堂、九間四面九体阿弥陀堂を中心として、北に寝殿、寝殿と釈迦堂をつなぐ南北棟の二棟廊、釈迦堂と阿弥陀堂をつなぐ小寝殿、釈迦堂から池へのびた釣殿廊、阿弥陀堂から南へ連続する一間四面堂、雑舎、諸施設を取り巻く築地などが検出されました。池は釈迦堂の東側（東池）、釈迦堂の南東部（中央池）、九体阿弥陀堂の東側（西池）の三箇所で見つかっています。いずれも南北に細長い形状で滝組・洲浜・荒磯・石組み・橋などの作庭技術がみられ、浄土式庭園です。西方浄土の世界を具現化したのでしょう。

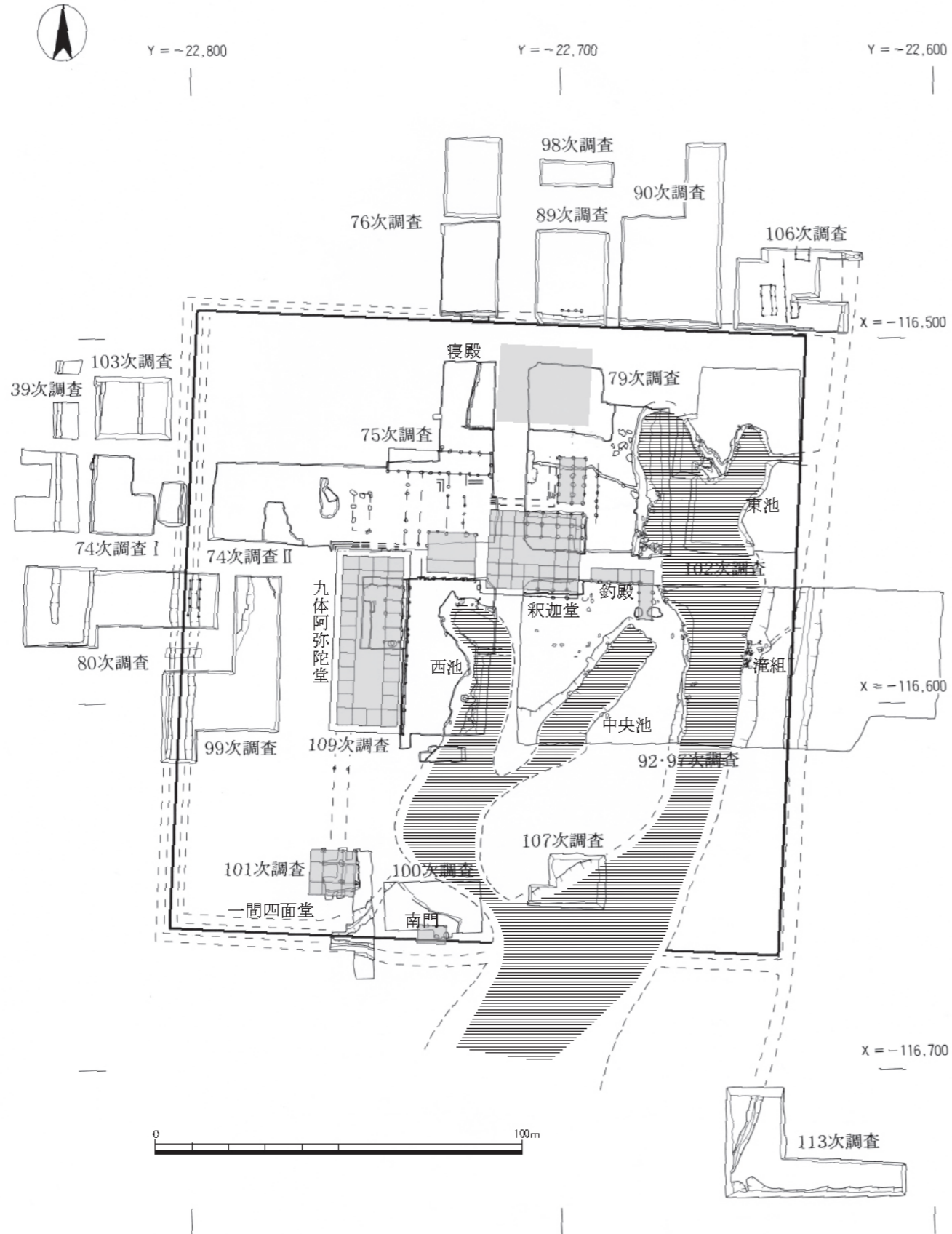
金剛心院が供養された2年後、保元元年に鳥羽法皇は東殿の御所で危篤状態に陥った時に、崇徳上皇が見舞いに駆けつけましたが、法皇の命で対面を許されませんでした。その後、崇徳上皇は兵を挙げ、保元の乱が勃発しました。この時に平清盛や源義朝などの北面の武士が活躍しました。東殿の御所は現鳥羽天皇陵の西側と推定され、田中殿の御所とは 300mの距離で目と鼻の先といえます。その後、崇徳上皇は讃岐へ配流され鳥羽離宮も変貌していきます。

白河天皇は応徳三年（1086）に堀河天皇に譲位し、鳥羽離宮（鳥羽殿）の造営を開始しました。院政の始まりです。鳥羽離宮は約 70 年の間に、白河院と鳥羽院によって造営された広大な離宮です。堀河天皇は造営に携わっていません。その位置は平安京の朱雀大路を羅城門から南へ延長した鳥羽作道を、3 km 程行った所です。文献には造営の様子がまるで都移りのようであると記されています。白河法皇は平家物語に天下三不如意（意にならないものに賀茂川の水、双六の賽、山法師）と記されているほど強大な権力を誇った方でしたから、その造営はさぞ大規模だったことでしょう。御所と御堂、そして政務をとる院庁や院近臣の邸宅が建ち並んでいました。

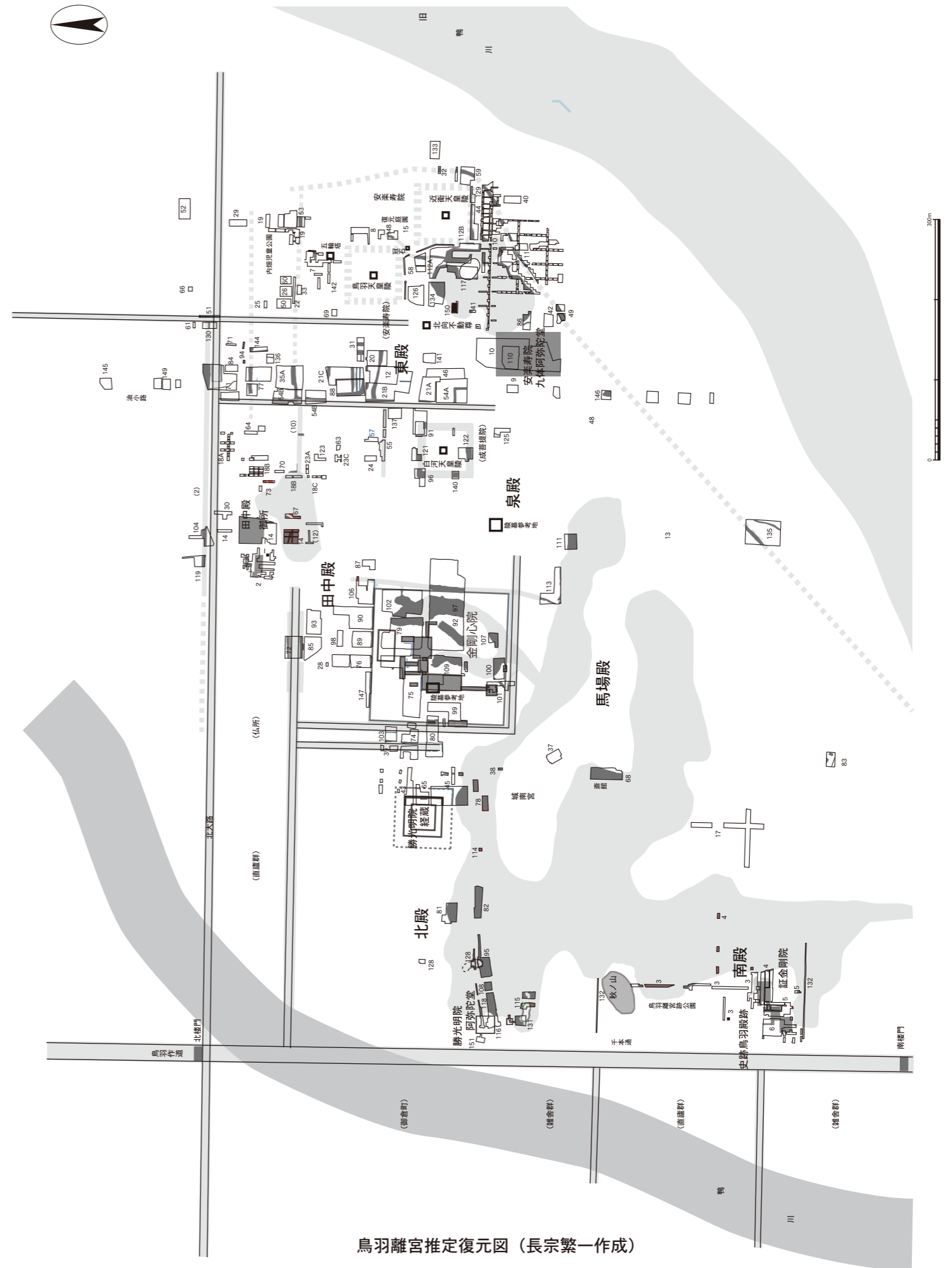
造営順にみると、南殿（証金剛院）・北殿（勝光明院）・泉殿（成菩提院）・馬場殿・東殿（安楽寿院）・田中殿（金剛心院）が造られました。現在、地上に残された遺構としては、城南宮・秋の山・北向不動尊・安楽寿院、3 基の御陵（白河天皇陵・鳥羽天皇陵・近衛天皇陵）があります。

発掘調査の成果をみてみると、南殿では築山と想定される秋の山周辺の調査で建物跡や園池跡が検出され、史跡公園として保存されています。その北に造られた北殿の勝光明院は、宇治の平等院鳳凰堂を模したと文献史料にあります。調査ではその基壇の一角と園池、そして東側で経蔵跡が見つかっています。経蔵は堀と築地塀に囲まれていました。

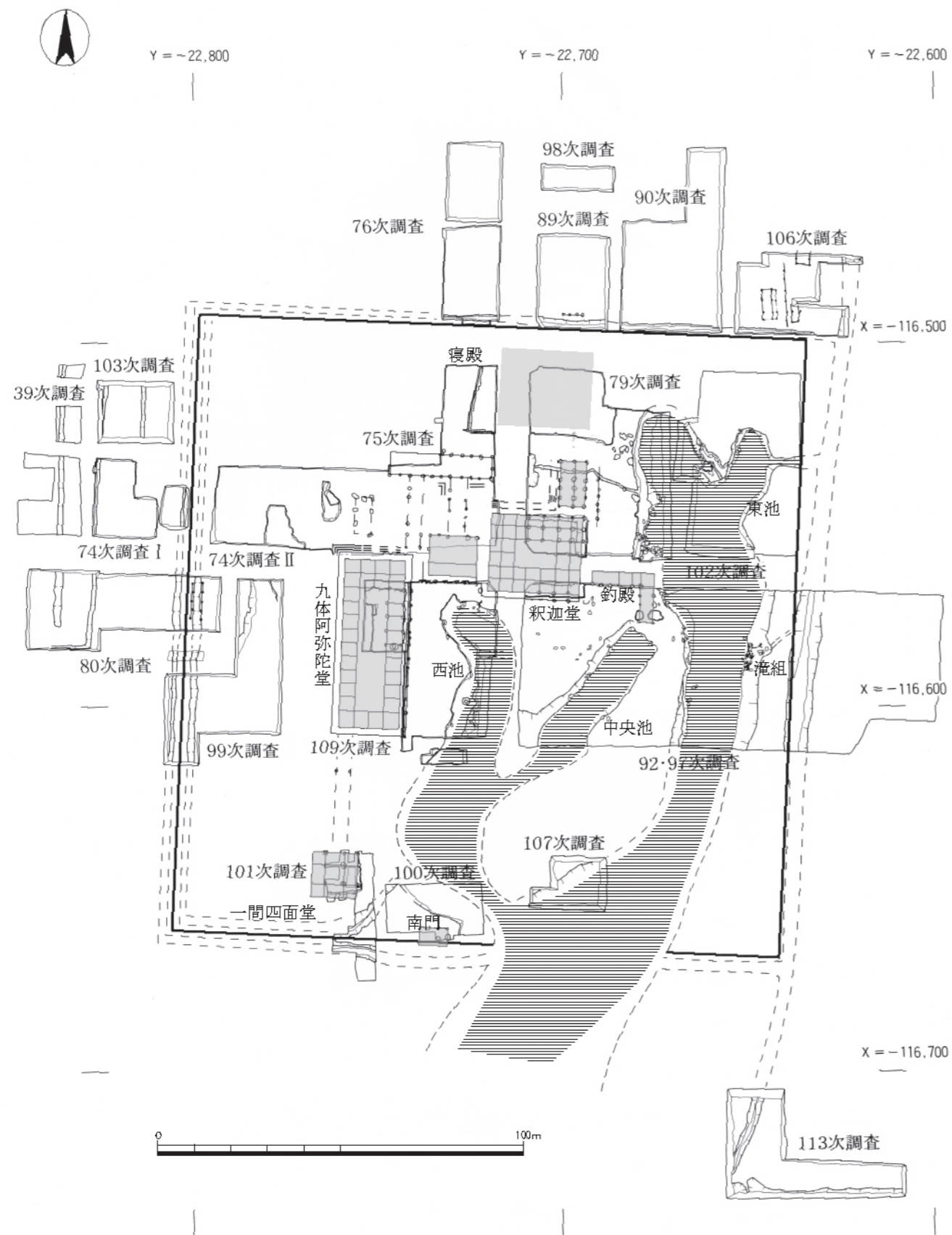
東殿は現在の白河天皇陵（成菩提院陵）から安楽寿院にかけての竹田浄菩提院町・竹田内畑町に推定されています。近衛天皇陵の南側で池の洲浜が見つかり、その後も宅地造成などで発掘調査を実施し、ほぼ大きさが判明しています。南北約 130 m、東西約 120mの大きさで、池の汀は緩やかな



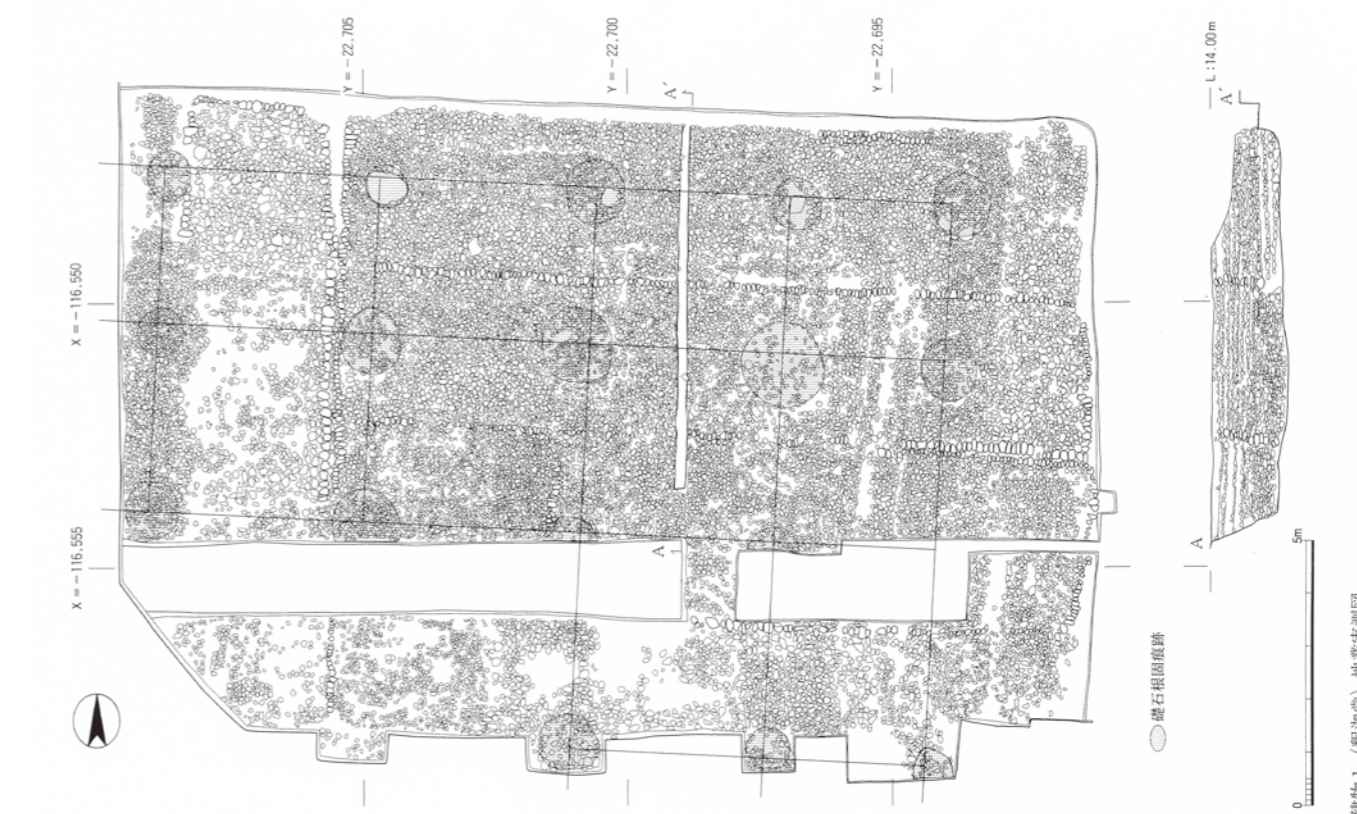
金剛心院遺構配置図



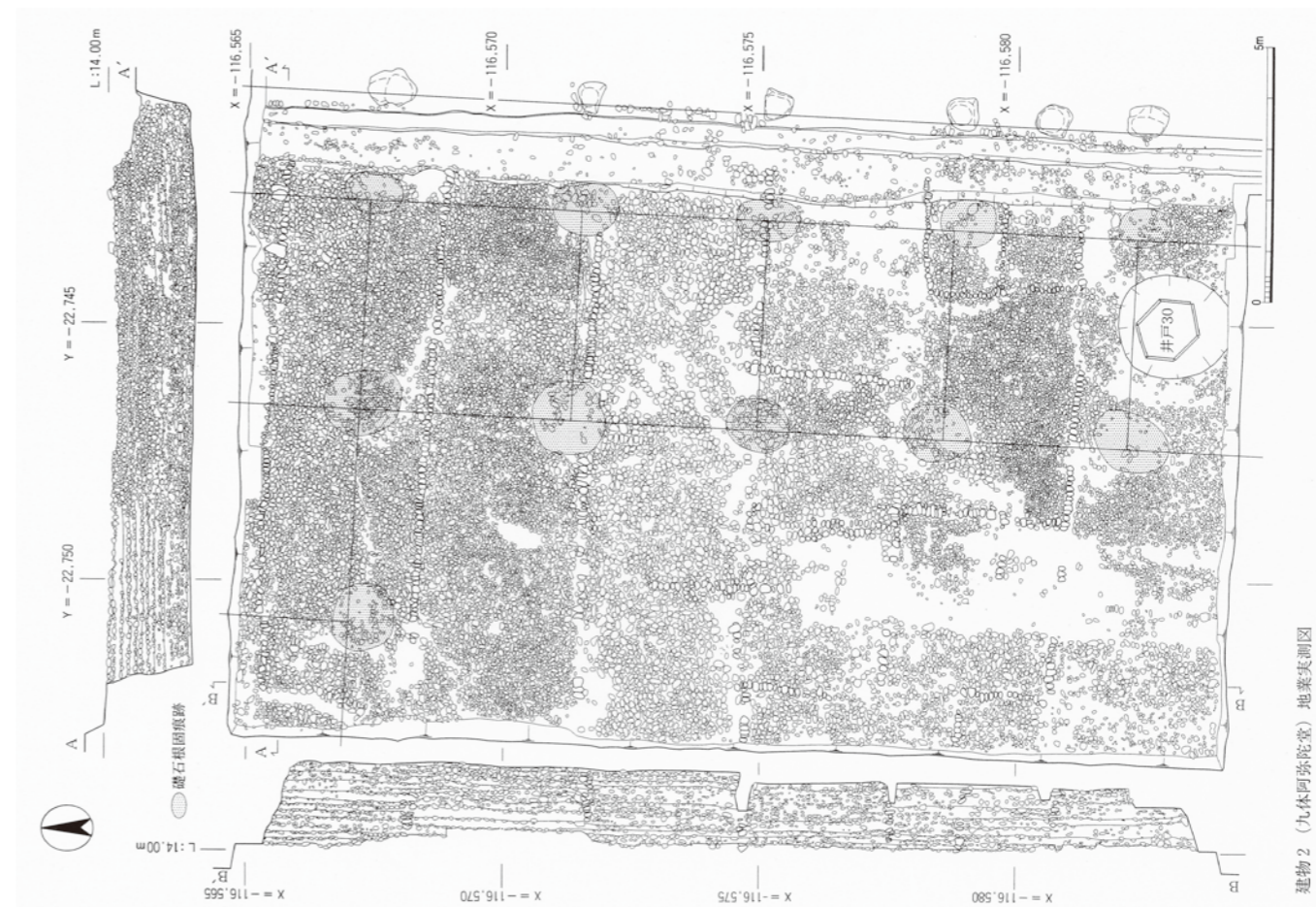
鳥羽離宮推定復元図（長宗繁一作成）



金剛心院遺構配置図

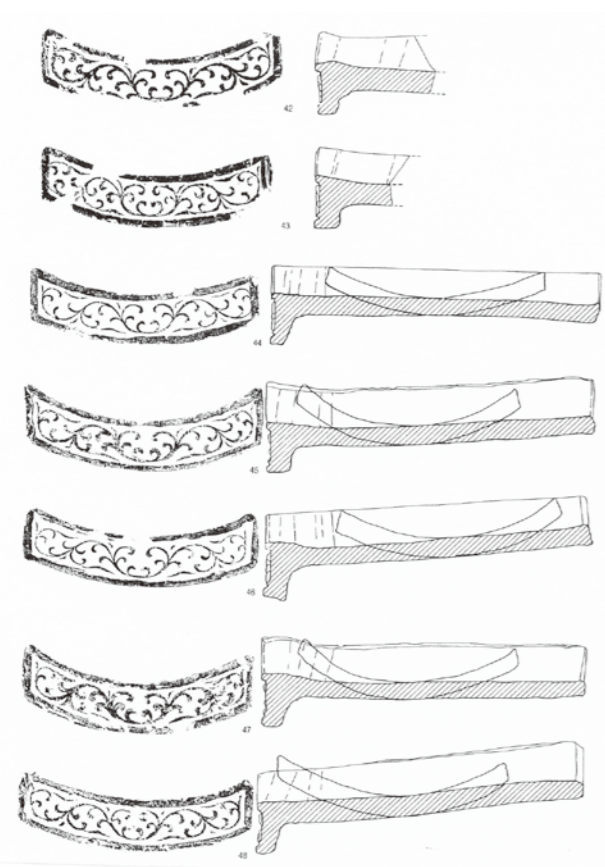
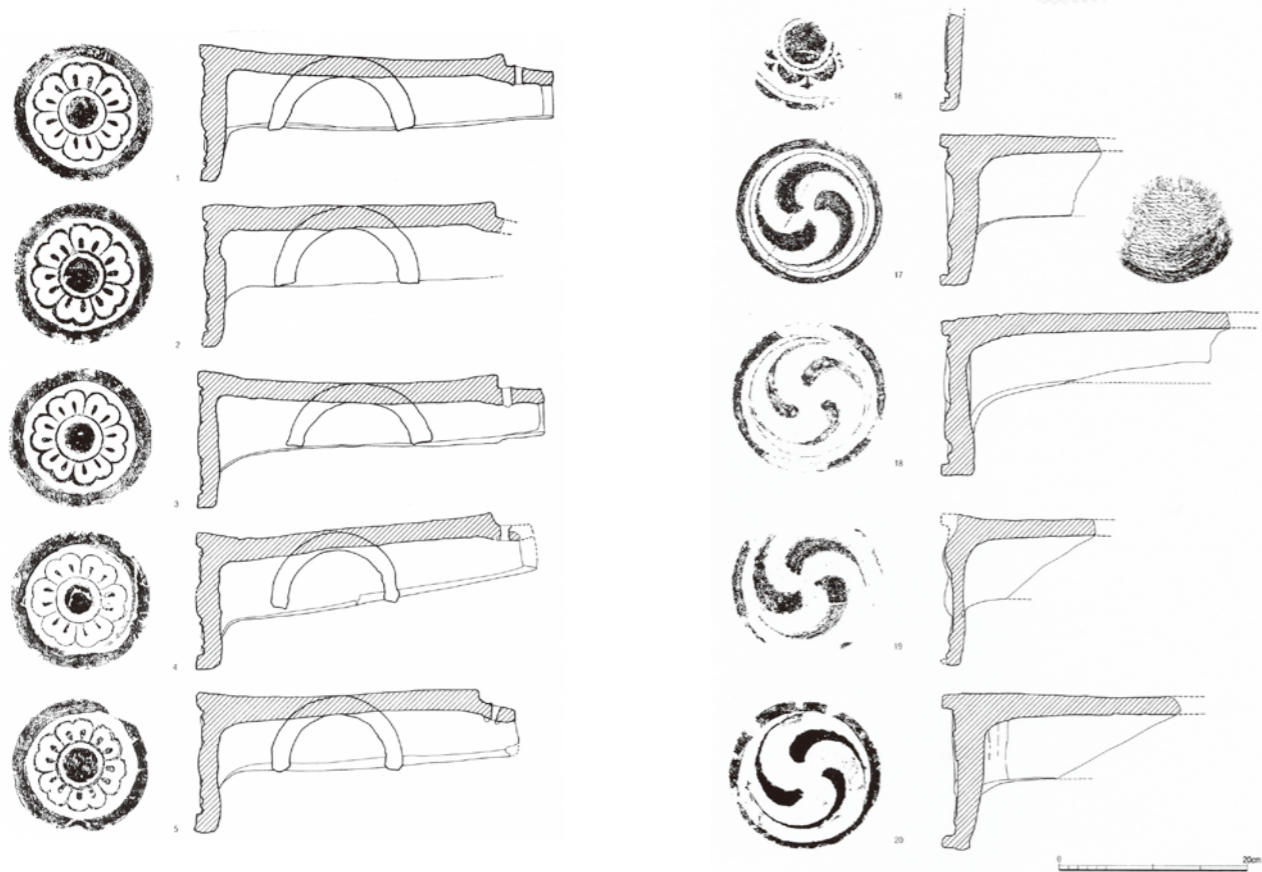


建物1 (釈迦堂) 地業実測図

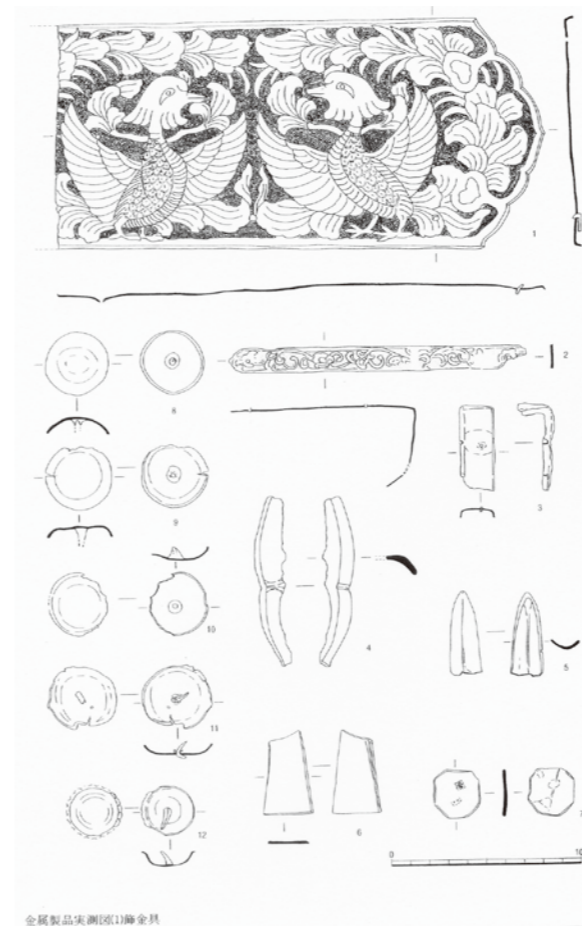
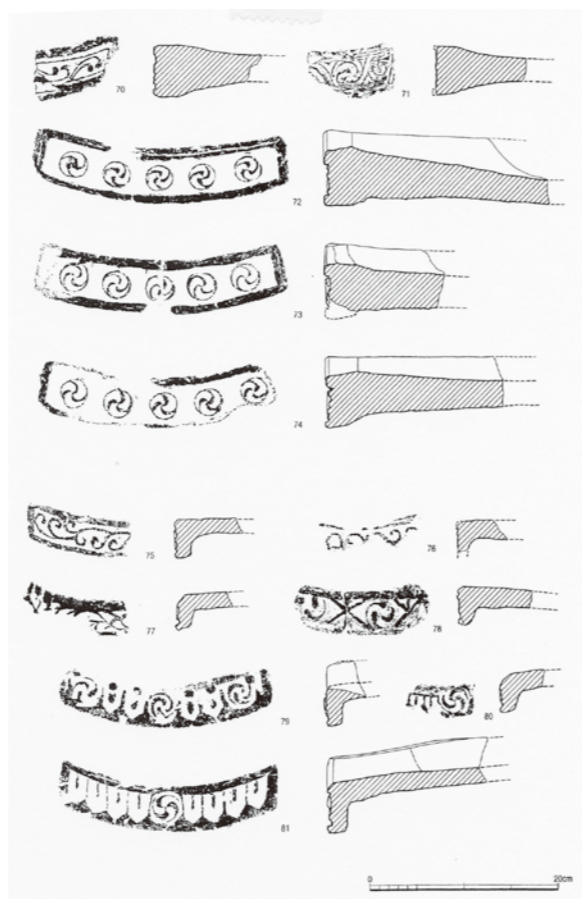


建物2 (九体阿弥陀堂) 地業実測図

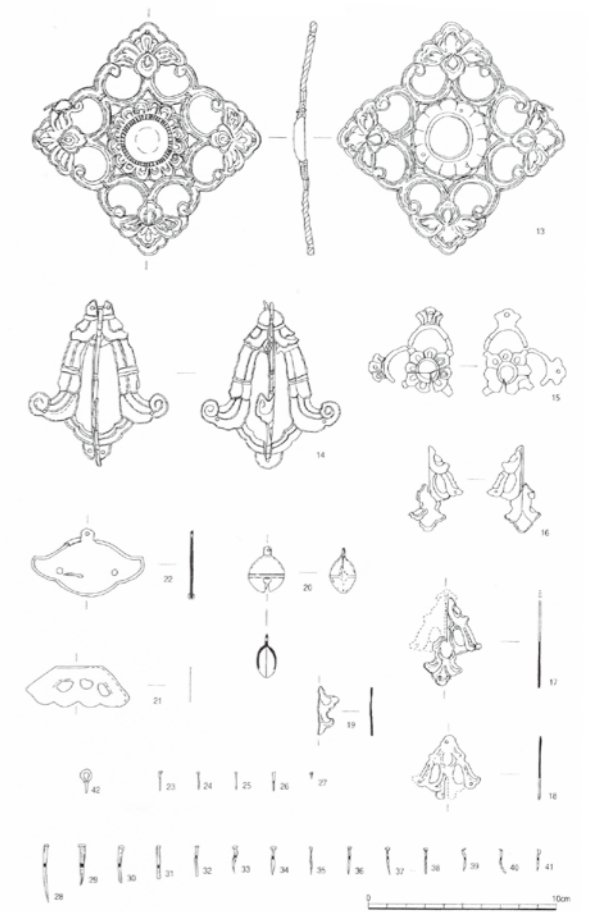
釈迦堂・阿弥陀堂地業



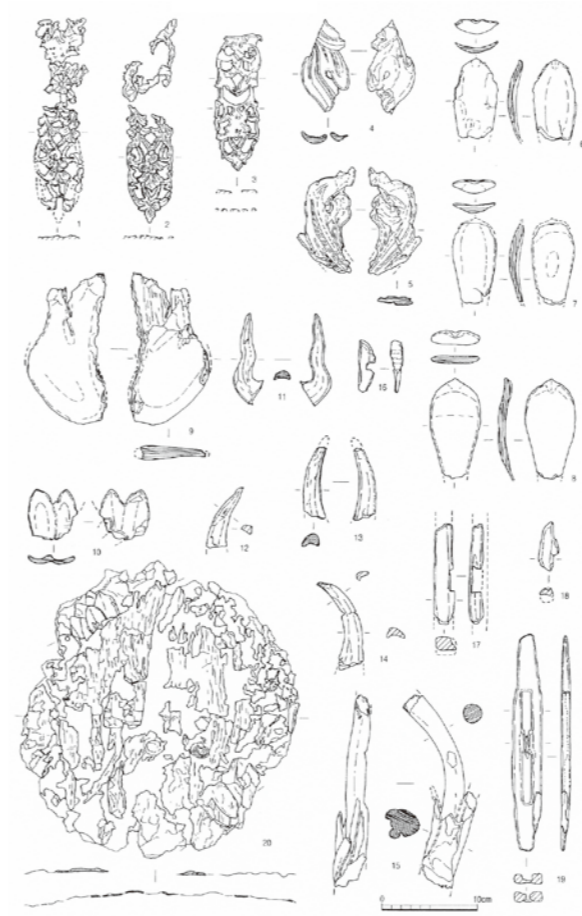
金剛心院跡出土軒瓦拓影実測図



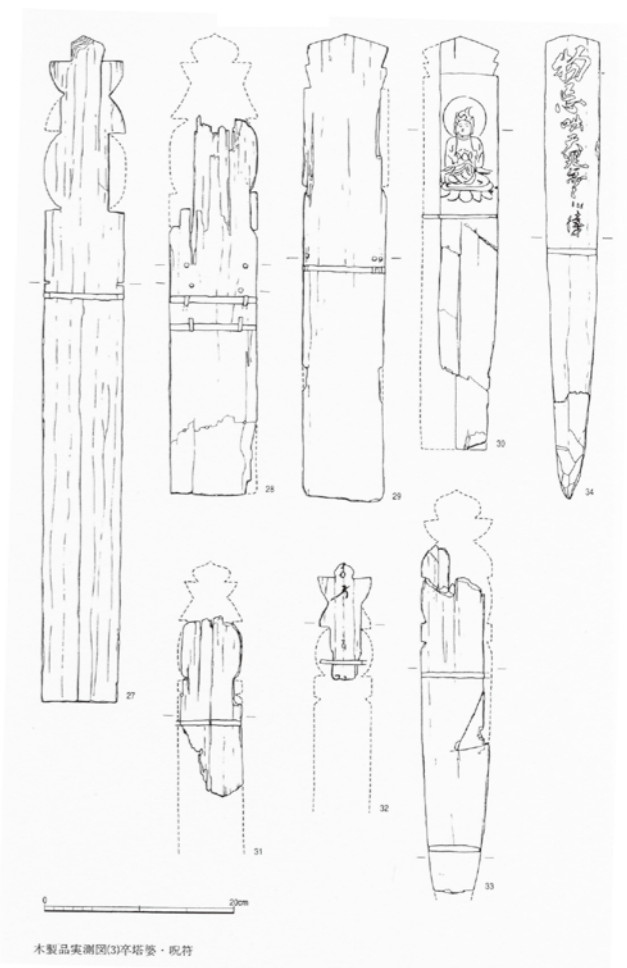
金属製品実測図(1)金具



金属製品実測図(2)金具・装製小型釘



木製品実測図(1)仏教遺物



木製品実測図(3)平船巻・祝持

金剛心院出土金属器・木製品

鳥羽離宮に運ばれた各地の瓦

<http://www.kyoto-arc.or.jp>
(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



写真1 金剛心院出土の播磨系瓦による屋根葺上げ復元

はじめに 鳥羽離宮は応徳3年(1086)、堀河天皇に譲位した白河上皇によって造営が開始されました。白河院による院政の始まりです。その後、白河院の孫にあたる鳥羽院によって70年ほどの間に平安京の南郊一帯に大規模な離宮の造営が行なわれました。

鳥羽離宮には、南殿・北殿・泉殿・東殿・田中殿と呼ばれる御所があり、御所にはそれぞれ証金剛院・勝光明院・成菩提院・安楽寿院・金剛心院の御堂が付属しています。また周辺には広大な浄土庭園がともなっていて、西方浄土の世界を具現化しようとの試みでしょう。

平安時代後期には、新築の建物であっても不統一の瓦で葺かれていたことが、これまでの調査例から判明しています。鳥羽離宮では京都産の瓦もみられますが、各地から運ばれた搬入瓦が多量に出土しています。

京都へ運ばれた瓦については早くから研究され、瓦の文様や瓦の作り方などを手掛かりに出土品の製作地の同定が行なわれてきました。現在では、先学の研究や各地の瓦窯跡の調査も進展し、同定が容易となっています。播磨(兵庫県)系、讃岐(香川県)系、尾張(愛知県)系のものが多く、大和

(奈良県)系や河内・和泉(大阪府)系も少量みられます。ここでは播磨系・讃岐系・尾張系の瓦について取り上げます。

播磨系の瓦 軒平瓦の成形に包込式という手法が用いられていることが特徴で、でき上がった平瓦を瓦当部の粘土で包み込んで仕上げています。播磨系瓦は鳥羽離宮跡からは広範囲にわたって出土していて、特に鳥羽法皇によって建立された田中殿に付属する金剛心院跡では、その軒瓦の半数以上を占めています。

注目される瓦として、金剛心院造営専用瓦と考えられる複弁六弁

蓮華文軒丸瓦と唐草文軒平瓦の一群があります(写真1)。複弁六弁蓮華文軒丸瓦は同一文様で5型式あり、軒丸瓦総数の52%、唐草文軒平瓦は10型式あり、軒平瓦総数の66%を占めています。いずれも、文様と大きさが同一規格で作られており、統一性が認められます。この一群の瓦は兵庫県神戸市神出窯跡、明石市林崎三本松瓦窯跡、高砂市魚橋瓦窯からの出土が判明しています。船に積み込まれ、瀬戸内海から淀川をさかのぼって運ばれたのでしょう。

金剛心院釈迦堂は「播磨国所課」(『兵範記』仁平三年十月十八日の条)とあり、播磨国が造営に関わったことが文献からもわかります。

讃岐系の瓦 播磨系ほど多くありませんが、鳥羽殿では南殿と金剛心院を中心に出土しています(写真2)。金剛心院跡では軒瓦総数の5%です。その特徴は瓦製作の道具にあります。瓦を叩き締める叩き板に、他地域に見られない太い縄を巻いていたのです。丸瓦の外表面、平瓦の凸面、軒丸瓦の瓦当裏面に、その叩き板の痕跡(縄目)が残っています。大振りの三巴文軒丸瓦、連巴文軒平瓦、唐草文軒平瓦がみられます。

香川県綾歌郡綾川町十瓶山古窯跡群から鳥羽離宮出土と同範の軒瓦が出土しています。南殿の瓦との関係は、最初に白河上皇が造営を始めたとき讃岐守高階泰仲が、御所を造進した功で重任を受けていることが文献から説明できます。

尾張系の瓦 灰釉瓦が特徴です(写真3)。灰釉瓦は平安時代後期から鎌倉時代に生産されました。



写真2 讃岐系の瓦



写真3 尾張系の瓦

京都の他遺跡では仁和寺と待賢門院建立の法金剛院で出土していますが、鳥羽離宮では東殿のみです。

巴文軒丸瓦・唐草文軒平瓦がみられ、灰釉を施した瓦と無釉の瓦もみられます。その瓦は愛知県名古屋市八事裏山窯・東山窯、大府市吉田窯、東海市杜山窯と同文同範関係にあります。窯は瓦専用ではなく山茶碗などの土器も同時に焼成する瓦陶兼業窯です。京都へは山茶碗などの食器類も運ばれました。

播磨・讃岐と同様に受領層との関係もありますが、尾張国内の荘

園に美福門院領や安楽寿院領が存在していました。安楽寿院一帯だけに集中するところからみて、荘園との密接な関係が窺えます。

おわりに 京都における院政期の寺院造営は、院の近臣や受領層の力によることが大きいとされています。建物や仏像を寄進することによって、成功や重任を受けたため、平安京建都以来の建築ラッシュといえるほど盛んに寺院造営が行なわれました。建物の屋根瓦も多量に必要となって、鳥羽離宮にも各地から運ばれたのです。

(前田義明)